

渡航前，渡航中，渡航後の振り返りから考える 交換留学に対する意識調査

名古屋大学国際教育交流センター

岩 城 奈 巳

要旨

本稿では交換留学経験者を対象に，渡航前・渡航中・渡航後とそれぞれの過程において，学生が自身の留学に対する考え，行動，目的を振り返り，その時々意識とその後の変化について調査した結果を紹介する。三段階の調査を通して，学生の留学に対する考え，成長そして帰国後の意識の変化を知ることができた。さらに，帰国後に自身の体験を振り返り，留学を通して成長したことを確認する意義，経験の総括を行うことの大切さも見えた。

キーワード

交換留学，日本人学生派遣

目次

1. はじめに
2. 調査方法
3. 調査結果
4. まとめ

1. はじめに

海外留学室では毎年100名前後の学生を交換留学を始め，協定校にて開催される語学研修，サマープログラムなどさまざまな形で海外に派遣しており，渡航前の留学相談から渡航中のフォロー，帰国後の報告まで，専任教員が個別に学生の対応をおこなっている。中でも，交換留学に応募するためには，渡航前年度の10月末に希望願を提出し，書類選考，面接を経て，合格者は翌年夏以降の出発となるため，実際の渡航までに面談が10回を超える学生もいる。よって，交換留学

を希望する多くの学生とは，少なくとも渡航の半年前から関わっており，さらに渡航中，帰国後，さらに大学院進学等で，長期にわたりつきあって行く学生も大勢いる。その過程の中，さまざまな場面で，相談を受け，個々に対応しながら，一人一人が希望する留学に沿った答えを学生と一緒に模索し，アドバイスをおこなっている。帰国後は，留学説明会や留学関連のシンポジウムにて体験談を発表する機会を設け，大学や今後留学を目指す学生への還元，また，自身の体験の振り返りを行うことで自分の留学の意義を再認識させるなど，留学経験を最大限に活かす場も提供している。個々の学生の留学の希望や渡航先が異なるように，受ける相談も一見異なっているように見えるが，学生が抱えている悩みや相談内容は，根底では多くが共通しており，本質的なところも似ている。しかしこれらの相談は，渡航前，渡航中，または渡航後でも，その都度質問を受けた際，対応しているため，共通点があることは理解していても，これまでそれらをまとめたものがなかった。しかし，今後の指導において，海外留学室を担当する教員が共通認識を持つこと，また，学生が参考としてウェブ等で読むことができる留学の準備段階から帰国までの物理的な相談事項から心理状況（学生が留学に対して期待していること，不安に思うこと，準備段階で苦労したこと等）をまとめた物の必要性を感じた。そこで一昨年度，全学間協定に基づく交換留学に合格した学生に統一した調査を，留学準備段階から渡航中，渡航後と実施し，それぞれの過程の追跡をおこなった。アンケートを通して見えてきたのは，学生の考えの変化はもちろん，指導する立場から全体像・共通点が把握でき，今後の留学希望者の参考に大いに役立つということ，また学生も，それぞれの過程において自身の状況をまとめることで留学を振り返り，自己分析ができたということであった。

2. 調査方法

調査は平成23年度に交換留学（1学年間・1学期間）が決定した29名（内訳は表1を参照）を対象におこなった。渡航前オリエンテーションでは、ワークショップを開催し、留学までの道のり、その際苦労したこと、留学中に期待していること、不安なことについて学生同士でディスカッションをおこなった。渡航中は、メールアンケートにて現在の状態の調査、また帰国後は、留学を振り返るメールアンケートを実施した。

表1

渡航先	人数	渡航先	人数
アメリカ	11名	インドネシア	1名
オーストラリア	2名	タイ	2名
デンマーク	1名	韓国	1名
ドイツ	4名	台湾	2名
フランス	1名	中国	3名

学部23名、修士2名、博士4名（男子15名、女子14名）

2.1 渡航前ワークショップ：学生の渡航前オリエンテーションを開催するのに合わせ、模造紙を使用し、留学に対して不安に思っていること、留学準備段階の現時点までで苦労したことなどについて話し合いをさせ、ホワイトボードにまとめた。学生からの反応がとてよく、ワークショップ後、「お互いの共通点を知ること、気持ちの共有が可能になった」、「心配・不安に思っているのは自分だけではないことがわかった」、「他学生の目的意識を聞くことで、自身の意識も向上させることができ、大変効果的であった」、などの感想が出た。

2.2 渡航中の様子：渡航後、3ヶ月を目安に、学生全員に、1) 充実していること；2) 苦労していること；3) 渡航前にやっておけばよかったこと；4) 帰国までに成し遂げたいこと、について聞いた。この調査の最大の目的は、学生の声を聞くことと同時にデータを得ることだったが、追伸という形で、現在の心境を書いた学生も多く、学生の様子を把握する上でも必要な作業だと感じた。さらに学生自身も考えていること、感じていることを文字化することで、現在の自身の状態を把握することに繋がったようであった。「アンケートに回答したことで、自分が今までやってきた

こと、これからやりたいことの整理整頓ができた」といったコメントが複数あった。

2.3 渡航後の最終調査：帰国後、1ヶ月を目安に、学生全員に渡航中の質問と同じ項目に加え、留学を振り返っての感想、また留学を希望している学生への提言を募った。

3. 調査結果

3.1 渡航前ワークショップ

このワークショップでは、5名1組の班に分かれ、留学先にて期待していること、心配していること、について、模造紙に書き出し、それらを、語学・コミュニケーション、生活環境、健康管理、その他、と大きく分類した。以下、学生からの意見をカテゴリー別にまとめたものである。

語学・コミュニケーション	生活環境	健康管理	その他
コミュニケーション能力向上	食事	病気、けが、体調管理	卒論
語学の上達	安全性（テロ等）	予防接種	就職
授業形態	盗難	渡航先で流行る病気	差別
ルームメイトとの関係	気温・寒暖		
日本人との関係			

語学・コミュニケーションについては、全員が能力向上を期待していた反面、半期のみ滞在学生は、半年でどこまで力を伸ばすことができるのか、不安を口にする学生もいた。文化面では、異なる価値観への懸念、ルームメイトとの関係を心配する声が多かった。健康面では特に、食事や栄養に関する懸念が多く話された。男女とも、特に欧米留学予定者は、野菜不足にならないようにする、太らないようにする、と言う声が多かった。病気を心配していたが、その理由は、言葉の不安から病院に行った際、症状を上手く説明できないから、というものであった。数年前に世界的に蔓延した豚・鳥インフルエンザなど、地域での感染についても話題があがった。犯罪に関しては、ほとんどの学生が寮生活を送るため、貴重品の保管方法やルーム

メイトとの信頼関係の構築などが話しの中心であったが、銃問題、テロについて言及する学生もいた。環境について興味深かったのは、「日本人との付き合い方」についてであった。ほとんどの学生が、「日本人がまわりにいない方がよい」との意見だったが、ある学生が、「先にいる日本人からの情報収集も大切だ」と提案したことから、「数名はいた方がよい」などの意見に変わったようであった。交換留学をする場合、卒業を1年遅らせなければならない学生がほとんどであるが、交換留学を決意した学生は、1年の遅れは気にしていない様子であった。卒業論文、修士論文のデータ収集を行う学生もいるので、データが確実に収集できるのか、という不安、帰国後の就職活動については、どのように留学経験を活かすことができるのか、などについての話が出た。

この他、準備段階にて苦労したこと、心配だったことについて話し合いをおこなった。圧倒的に多かったのは、語学スコアの取得とビザの申請について、であった。交換留学合格者は全員、渡航先の大学が設定している語学要件を満たしているが、スコア取得までかなり苦労した学生も何名かいた。ビザについての懸念は、「手続きが把握できなかった」、「辞書で調べても出てこない単語が数多くあった」、「ビザが取得できるのか心配だった」、などであったが、自分で動き、実際手続きを済ませると、必要以上に心配していた、という学生がほとんどであった。また、孤立・孤独感に直面する学生も多く、「周りに留学を希望する友達がいなかった」、「一緒に留学について考えてくれる友達がなかった」、「近くに留学をする友人が少なく、一人で勉強をしているのが一番つらかった」、「孤独に感じた時もあったし、また点数が思ったように伸びないときは、本当につらかった」、「いつ終わるか先のよめない就職活動を行いながら、留学の準備を進めなくてはいけなかった」、「留学先への書類作成と、就職活動とに追われた時期は少し辛いと感じた」などが上がった。その他、両親の理解を得ること、資金調達について、「親に頼らずに自分ですると決めていたので、奨学金をもらうための成績などをいつも気にしていた」などもあがっていた。

3. 2 渡航中について

渡航中の学生に、留学中の様子を、1) 充実していること；2) 苦労していること；3) 渡航前にやっておけ

ばよかったこと；4) 帰国までに成し遂げたいことにわけて、調査を実施した。以下、項目に沿って、実際の渡航後の様子を抜粋する。

1) 充実していること

- ・自分の英語の上達を実感できること、仲の良い友達ができただこと
- ・日本で手に入らない文献を簡単に入手でき、集中的に読めること
- ・授業にも慣れ、不安なく充実して学習出来ていること
- ・専門分野の英語が飛び交う教室でそれを理解しようと努めること
- ・実験の授業（とにかく楽しい、レポートの書き方など学ぶことが多い、クラスメイトとの交流）
- ・様々な文化・考え方に触れることが出来ること
- ・寮の環境がいい（留学生や現地の学生と交流しやすい）ジムが充実していること
- ・学校生活。経済の授業では毎週レポートの宿題が課され、3つ授業をとっていた私は3つのレポートを毎週書いており、非常に勉強になっていること

2) 苦労していること

- ・ルームメイトとのコミュニケーション。初対面の人とのコミュニケーション
- ・ルームメイトとの交流が大変。専門も違うし、興味も違う
- ・授業の英語に完璧についていけないのでそこで苦労している
- ・私のアクセント英語に慣れてない人と向き合うとき、少しナーバスになる。冷たくあしらわれる時もある
- ・言葉が十分にできないのと、上手く反応ができなくて、人との話が続かない
- ・英語のリスニング能力の上げ方が分からないこと。未だにどうしても現地学生と触れ合う時に微妙なためらいや抵抗感を感じてしまうところ
- ・いまだに授業の英語に完璧についていけないのでそこで苦労している
- ・宿題（量が多い、読み書きをするのにかなりの時間を要する）
- ・専門の授業を取り、そのクラスについていくことが少しばかり大変なこと
- ・水でのシャワーはなかなか慣れない。暑い事。イン

ドネシア語での生活

- ・曇天が多く、日照時間も短いので、気を抜くと鬱になりそう。田舎で暮らすのも初めてなので戸惑いも多いこと

3) 渡航前にやっておくべきだったこと

- ・とにかく語彙をもっと増やしておけばよかったと後悔している
- ・英語の勉強。単語など、本当にもっと頑張っておけばよかったと感じる。次来る学生には本当にしっかりやるように、伝えてほしい
- ・時間はなかったが、実用的な英語の学習
- ・英語の勉強をもっと早くからスタートし、リスニングとスピーキングを特に磨いておくべきだった
- ・日本で使っていた教科書や参考書を持ってくること
- ・ある程度、生活できるレベルのインドネシア語の学習
- ・語学の勉強。ドイツに着いたそのときから今もずっと身に沁みて感じている
- ・やっておいてよかったことは、台湾でのサマースクールに参加したこと。サマースクールに参加したおかげで、中国語を話すことに慣れ、留学初期に言葉の面で苦勞することが少なかった

4) 帰国までに成し遂げたいこと

- ・語学力を上げ、英語を使った専門の勉強にくらいつく
- ・さまざまな国籍の違う友達を作り、コミュニケーションをとる
- ・英語の上達、友達をたくさんつくる
- ・経済の知識をもっとつける（具体的に金融、会計など、自ら新聞を読み、学んだ知識を実際に生かしながら経済の流れを読み解ける人材になりたい）
- ・実際にビジネスの場で使えるまでの英語能力をつけたい。そのために、実際に大学で接客業を体験したり、学業後にはアメリカでインターンに挑戦し、自分の中で英語で働くということに自信をつけたい
- ・ドイツ語の認定試験に合格する
- ・HSK 6級合格、口語試験初級合格、中級挑戦
- ・研究のための調査を進めること。最低でも、今年の夏に再度タイを訪れるときのためのプレ調査だけは絶対に終わらせたい。また、最後の最後までタイ語の学習は継続し、留学期間に見合うだけの能力にし

たい

回収したアンケートから、到着後充実した現地での生活を送ることができ、さらに日本とは異なる授業形態にも楽しさを見いだしているようであるが、同時に苦勞していることも現地での生活及び授業であることがわかった。新鮮な生活の反面、講義を受講する語学力が身につけていないことを挙げている学生が多かった。この結果は締め切り後、ただちに海外留学室でまとめ、学生と共有したところ、学生から、「悩んでいるのは自分だけではなかった」、「読んで気持ちが軽くなった」、「語学面の苦勞は当然のことだと改めて理解できた」、「目的意識が高い人が多く、自分も負けていけないと思った」、「諦めずにがんばろうと思えた」など、反響が多くあった。渡航前と同様、「辛いのは自分だけではない」という意識を持つこと、このような共通の考えを学生同士が共有することの大切さを改めて感じた。

3. 3 留学を振り返って

学生が帰国し、数ヶ月経過したところで、留学を振り返っての総体的な感想、そしてこれからの留学を目指す学生たちへの助言を求めた。

総体的な感想

- ・私にとっては新しい学問を学んだというよりも、国際社会の土俵に立つためのステップであったように思う。この一步を踏み出さなければいつまでも日本に留まるだけになったかもしれない。常に世界における日本の位置を意識したり、自分が今後何をしたいのか考えたりする良い機会になった。留年すること、そして金銭面で最初は留学を躊躇していたが、本当に中身の濃い1年にすることができ全く後悔していない
- ・つらい時期もあったが、自分の目標に向かって精一杯努力できたと思う。留学を通して、良い意味で“鈍感”になった。どんな時もよくよしないので、へこたれずに、物事を前向きに捉えられるようになったと思う
- ・楽しい事：大変だったこと＝4：6ぐらいで、大変なことが多かったけどとてもいい経験になった
- ・留学が終わってしまうとあっけないくらい元の日本での生活が待っていて、少し残念な感じがする。や

り残したことはあまりないが、やはりもっと長くいられたら、と思う

- ・この留学は自分の人生の中で間違いなく大きな転換点となったと思う。やはり向こうの全く違う価値観や空間の中で体験したことは今の自分の考え方にとても強く影響しているように感じる。自分にとって本当にこの留学は、今まで過去に自分がやってきたことや英語への関心、またそれまでの準備あつてのものだったから、すごく満足感はある。ただちょっと授業にも完全に慣れたところだったので何となく惜しい感じもする

留学生への提言

- ・留学したいという気持ちがある人には、どんな形であれその思いを実現させてほしい。準備で大変なこともあると思うが、留学先での出会いや経験は確実にそれを上回って自分に返ってくる。これから留学に行く方が、その人にとって最高の留学生活を送れることを願っている
- ・行ってみたいという気持ちがある人は、行くべき。行く前には様々な心配があると思うが、行ってしまえば協力的な人もたくさんいるので、何とかこなしてしまうものだと思う。留学先では、現地の学生・留学生とたくさん交流することができ、お互いの国について話したり、料理を作ったりしてとても楽しむことができた。そして、「異文化コミュニケーション」と言うが、「異文化」であることはコミュニケーションの壁になるのではなく、コミュニケーションを魅力的にするものであると実感した。これは、ただ旅行に行くだけではなかなか感じられないことではないかと思うので、ぜひ長期滞在することで味わってほしい
- ・留学する動機や目的は人それぞれなので、他人と比べるばかりではなく、自分らしい留学を目指して頑張してほしい
- ・一年間休暇をもらったと思って本当にやりたいことだけをやって、悔いのないように過ごしてほしい。とくに学生として異文化交流するのはこれが最後かもしれないので、それを活かして今しかできない事をしてほしい
- ・私のように、内向的な人間ほど留学して何かを変えて欲しいと思う。意外に外国語のほうが、臆せずストレートに意見を言えるものだと私は感じた。
- ・留学計画は早めに、行きたいと思ったその時に行くべき。後に引きずるほど、大学で許された時間は減っていくので。言語や海外経験を積めば自分の世界は広がり、世界地図は小さく見えるので、世界に興味があつてもあるならば、ぜひ留学を考えてみてほしい。僕の場合は短期留学から始めたので、長期が億劫であれば、1か月などの短期から始めてみるというと思う
- ・自分の「やってみたい!」という思いに正直になることはやっぱり大切だと思う。僕は、「やってみたい!面白そう!」とワクワク思っていることを実行しないでは、自分を満足させることができなかったので、4年後期から1年間の留学に行き、帰国後就職活動をして、その後卒業する道を選んだ。留学を通して、自分の進んで行きたい方向性が定まったので、留学が就職活動に影響を与えるとは思っていない

例をあげた上記以外にも、帰国後の留学を振り返っての総括では、全員が留学に対して肯定的な意見で締めくくっており、また、これから留学を目指す学生に対しては、「行きたい気持ちがあれば必ず行動にうつすように」と、アドバイスをしている。また卒業を1年伸ばすことに言及している学生も多数いたことも興味深い。残念ながら現時点では、本学の単位互換制度は所属部局によって異なっており、留学先で取得した単位が卒業単位として認められるかは部局の裁量で決まるため、共通の規則は存在しない。さらに、手続きが煩雑なため、現段階では、ほとんどの学生が単位互換をせず、1年伸ばして卒業又は進学している。そのため、留学を考え始めたばかりの学生にとっては、この点がとても大きな問題になっており(岩城・野水, 2010; 村上, 2012)、留学を断念する一番の要因となっている。だが、学生からの感想を読むと、経験者はそれを凌駕する経験を得ており、学生と話していると、「なぜこんなことで悩んでいたのか」、「卒業が1年遅れるだけで留学のチャンスを見逃すところだった」などの声を聞く。ただし、大学に1年余分に在籍する、ということは、その期間は授業料がかかることに繋がり、経済的負担を考えると、安易に「1年伸ばせばよい」と言うのは難しい。いずれにせよ、留学経験者からの意見は、我々教員が学生にアドバイスをおこなうよりも効果的であり、留学に一步踏み出せないでいる学生にとって

は心強い言葉である。事実、留学説明会等でも、反響が大きいのは経験者の体験談で、「〇〇さんの話を聞いて留学を決意した」、「考えるようになった」、「具体的に理解できた」、などの声が多数あがっている。

3. 4 体験談の共有と振り返り

海外留学室では、年に1回の留学関連のシンポジウムを主催しており、その際、複数の留学経験者に体験談を発表してもらっているが、その他も多く講義やワークショップ等にて留学経験者に自身の経験を紹介する発表を依頼している。長いものでも20分ほどのプレゼンテーションであるが、学生の経験が詰まった発表であり、どの学生の発表もそれぞれ個性的で、素晴らしい。留学を志したきっかけから、語学習得、渡航後の苦勞から、留学で得たもの、成長したこと、今後目指すもの、希望者へのアドバイスと、渡航前の姿を知る教員が驚くほどの成長が感じられる学生も多数いる。発表は留学に興味を持つ学生を増やすことが目的ではあるが、実際は留学を終えた学生が、自身の留学体験を振り返り、客観的に見ることで、経験した体験の総括を行う場でもある。学生からは、「改めて留学の意義を感じた」、「発表がなければ、自分の経験を考え直す場がなかったので感謝している」、「自分の経験を振り返って、留学前の志を思い出した」、「経験を発表したことで、自分の中での留学をまとめることができた」など、振り返りや総括が大切な一部を占めていることを改めて認識した。

4. まとめ

学生の渡航前・中・後の様子を文字化することで、学生の成長がより明確になり、理解できた。

また、学生自身も留学経験をそれぞれの過程で振り返ることで自分の中での経験を消化し、次に進むステップになったのでは、と感じる。

まず渡航前は、期待も大きいですが、現地での生活になじめるかということ、また、漠然としか想像できない留学先での生活にほとんどの学生が不安を抱いているということがわかった。渡航前オリエンテーションにて話し合いを行ったことで、共通した期待、そして留学に向けての懸念等もあるということが学生同士共有できたので、この試みは成功であったと感じる。渡航中の調査ではやはり、語学の問題に直面する学生が多

く、「次に送る学生には英語をしっかりとやっておいて欲しい」、「語学の勉強はやってもやりすぎることはない」など、今後の留学希望者、留学決定者に向けてのアドバイスが多かった。しかし、語学が出来ずに悩む、というよりは、出来ないことがバネになり、もっと頑張ろう、とその先を見据え、考えている学生が大半であることもわかった。よって、学生への、「語学をしっかりと磨いておくように」というアドバイスも、「事前にもっとやっていたら、今の生活がもっと充実していた」と捉えることができる。語学の次に多かったのは、ルームメイトに関する問題であった。中には、どうしても折り合いがつかず、他のルームメイトを捜すことになった学生もいるが、大半の場合、話し合いを通じてお互いが理解し、問題を乗り越えていったようである。この経験も、体験した学生は成長の一部と肯定的に捉えている場合が多かった。さらに、この結果を他の留学中の学生と共有したことで、お互いの渡航中の状態を把握することができ、自分だけが悩んでいるのではない、という意識を持たせることができたと感じる。帰国した学生の留学全体の感想としては、まず、どの学生も行って良かった、と感じているということがわかった。当然、多かれ少なかれ、留学中に、何らかのトラブルは抱えるものの、留学自体を振り返る際には、それらすべてが成長の過程であったと捉えていることがわかる。学生からの感想にも、それらはマイナスに作用している様子ではないことが伺えた。また、今回の調査を通して自身の留学経験を整理させることも留学教育の一環として捉える必要があることを実感した。今後もできるだけ多くの学生に、留学経験を何らかの形で発表させ、自身の留学経験を文字化し、振り返る作業をさせていきたい。海外留学室では、幅広い学生に留学について考えるきっかけを与え留学を支援していくと同時に、留学経験者の「留学後のこれから」も支援していきたい。

参考文献

- 岩城奈巳・野水勉 (2010) 「名古屋大学生と海外留学－全学教養科目「現代世界と学生生活」課題レポートから見えてきたもの－」, 名古屋大学留学生センター紀要 第8号, pp.17-22.
- 村上壽枝 (2012) 「海外留学後の就職と社会－海外留学と企業の採用環境の現状分析を踏まえて－」, ウェブマガジン「留学交流」, vol.12.